

- ① 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のロームブロック・粒少混。
- ② 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のロームブロック・粒混。締りやや弱。
- ③ 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1cm以下のローム粒多混。締り・粘性やや弱。
- ④ 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1～2cm程度のロームブロック、1cm以下のローム粒少混。締りやや弱。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR3/1) ③層に類似。φ 1cm以下のローム粒少混。締りやや弱。
- ⑥ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1～2cm程度のロームブロック多混。締りやや弱。
- ⑦ 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒少混。締りやや弱。
- ⑧ 灰黄褐色土 (10YR4/2) ⑥層に類似。φ 1～2cm程度のロームブロック多混。締りやや弱。
- ⑨ にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 黒褐色土ブロック少混。粘性強。壁体崩落土と考えられる。
- ⑩ 明黄褐色土 (10YR6/6) 黒褐色土ブロック少混。粘性強。壁体崩落土と考えられる。

第27図 SK 1

- ① 黒色土 (10YR2/1) φ 1cm以下のローム粒微混。
- ② にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1cm以下のローム粒微混。
- ③ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒少混。
- ④ にぶい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1cm以下のローム粒混。炭化物少混。締り・粘性やや弱。
- ⑤ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒混。粘性やや弱。
- ⑥ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1cm以下のローム粒混。締りやや弱。
- ⑦ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒少混。締りやや弱。
- ⑧ 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1cm以下のローム粒少混。粘性強。壁体崩落土と考えられる。
- ⑨ 明黄褐色土 (10YR6/6) 黒褐色土ブロックやや混。
- ⑩ 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1cm程度のⅢ層ブロック多混。締りやや弱。

第28図 SK 2

- ① 黒褐色土 (10YR3/1) φ 2cm以下のⅡ層ブロック少混。締りやや弱。
- ② 暗褐色土 (10YR3/3) φ 2cm以下のⅡ層ブロック微混。
- ③ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 2cm以下のⅡ層ブロック少混。
- ④ 黒褐色土 (10YR2/2) φ 2cm以下のⅡ層ブロック少混。
- ⑤ 暗褐色土 (10YR3/4) φ 5cm以下のⅡ層ブロック多混。φ 3cm以下のロームブロック微混。
- ⑥ 黒褐色土 (10YR2/2) φ 2cm以下のⅡ層ブロック微混。締り・粘性やや弱。
- ⑦ 褐色土 (10YR4/4) 黒褐色土粒少混。粘性・締り強。壁体崩落土と考えられる。
- ⑧ 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1cm以下のⅣ層粒微混。φ 5cm程度のロームブロック少混。締り・粘性強。

第29図 SK 3

SK 3 (第29図、PL.16)

D4グリッド、標高46.4mに位置し、SK 4・5と近接している。

表土下、Ⅱ層上面検出の遺構である。上面は根攪乱を受けているが、本来の平面形は直径0.78mの円形と推測できる。検出面からの深さは1.7mを測り、壁面は埋没時の崩落や根攪乱によって凹凸な形状を呈している。埋土は黒褐色土を主体とし、8層に分かれる。凹レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積により埋没したものと考えられる。このうち⑦層は、黒褐色土粒をわずかに含むものの、地山によく似た色調・土質であり、壁体の崩落土と推察している。

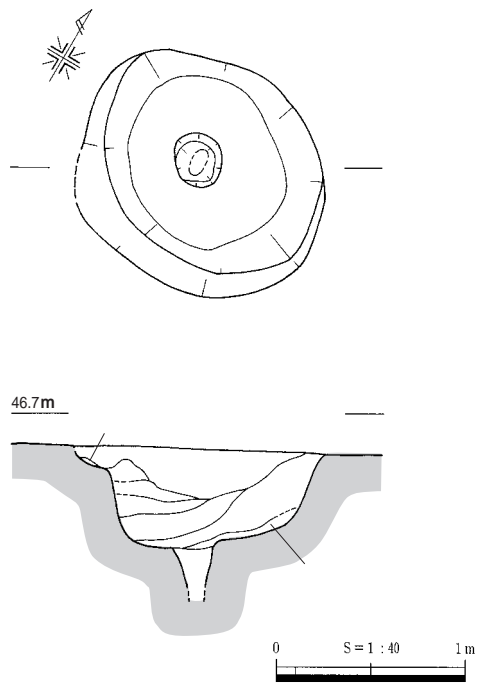
本遺構は、規模、平面形態から落とし穴と考えるが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK 4 (第30図、PL.16)

C・D5グリッド、標高46.5m、SK 3からは南に4mの位置にある。Ⅰ層上面検出の遺構である。

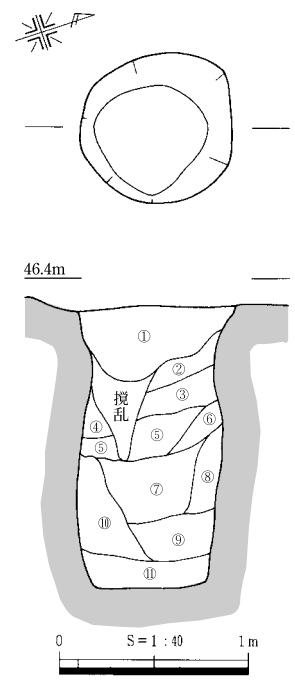
平面は長軸1.34m、短軸1.2mの楕円形で、検出面からの深さは54cmを測る。底面には、直径20cmのピットを1基伴っている。このピットの底は根の攪乱を受けており、本来の深さは不明である。

埋土は8層に分かれ、地山ブロックを含む黒褐色土・暗褐色土を主体とする。⑦層は地山によく似



- ① 黒褐色土 (10YR2/3) φ 1 cm以下のローム粒微混。
- ② にぶい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1 cm以下のローム粒、黒褐色土粒混。
- ③ 褐色土 (10YR4/4)
- ④ 暗褐色土 (10YR3/4) φ 4 cm以下のロームブロック多混。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR2/3) φ 2 cm以下のII層ブロック、ロームブロック多混。
- ⑥ 暗褐色土 (10YR3/4) φ 2 cm以下のロームブロック微混。
- ⑦ 黄褐色土 (10YR5/6) 壁体からの崩落土。粘性強。
- ⑧ 暗褐色土 (10YR3/3) φ 1 cm程度のロームブロック微混。

第30図 SK4



- ① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm程度のII層ブロック少混。
- ② 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 2 cm以下のII層ブロック、III層ブロック少混。
- ③ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 4 cm以下のII層ブロック、III層ブロック多混。
- ④ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1 cm程度のロームブロック少混。②層に類似。締りやや弱。
- ⑤ にぶい黄褐色土 (10YR5/3) φ 3 cm以下のII層ブロック、ロームブロックを多混。締りやや弱。
- ⑥ にぶい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1 cm以下のローム粒多混。締り・粘性やや弱。
- ⑦ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。締り・粘性やや弱。
- ⑧ 明黄褐色土 (10YR6/6) φ 1 cm以下の黒褐色土粒少混。壁体崩落土か。
- ⑨ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1 cm以下のローム粒多混。締りやや弱。
- ⑩ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1 cm程度のロームブロック多混。締りやや弱。
- ⑪ 黄褐色土 (7.5YR7/8) φ 2 cm以下の黒褐色土ブロック微混。壁体崩落土。粘性強。

第31図 SK5

た色調・土質であり、壁体からの崩落土である。埋土の堆積状況から、自然堆積によって埋没したものと考える。

本遺構は規模・平面形態から落とし穴と推測されるが、他の落とし穴に比べて浅く、ピットを伴っている点も特徴的である。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK5 (第31図、PL.17)

C4グリッド、標高46.3m、SK3からは北に4mの位置にある。

現道下に確認した遺構で、II層上面の検出となった。

平面形は円形で、規模は長軸84cm、短軸80cm、検出面からの深さは1.5mを測る。埋土は11層に分かれ、地山ブロックを含む黒褐色土・灰黄褐色土・にぶい黄褐色土を主体とする。⑧・⑩層は地山によく似た土であり壁体からの崩落土と考える。堆積状況からは、土の流入と壁の崩落を繰り返しながら、自然に埋没していった状況が窺える。

規模・平面形態から落とし穴と考えるが、遺物は出土しておらず時期は不明である。

SK6 (第32図、PL.17)

調査区東側のA3グリッド、標高45.9mに位置する。表土下、II層上面検出の遺構である。

平面形は長軸1.1m、短軸1mの楕円形で、検出面からの深さは1.6mを測る。壁面は埋没時の崩落

や根攪乱によって凹凸な形状を呈している。埋土は9層に分かれる。地山ブロックを含む黒褐色土・暗褐色土を主体とし、⑦・⑧層は壁体崩落土の可能性がある。堆積状況から、自然堆積による埋没と考える。

本遺構は、規模、平面形態から落とし穴と考えるが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK7 (第33図、表5・6、PL.17・23)

P6グリッド、標高46.9mに位置し、南にSB3が近接する。

表土下、II層上面検出の遺構である。

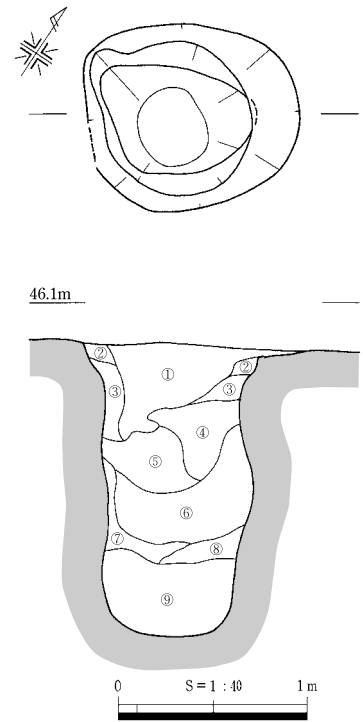
上面は耕作による攪乱を受けているが、長軸1.1m、短軸1mの隅丸方形に復元できる。検出面からの深さは37cmである。

埋土はにぶい黄褐色土層(①・②層)と暗褐色土(③層)に大別できる。①・③層からは磨耗した土器小片が出土し、③層には炭粒も混入していた。出土遺物のうち、底面直上出土の遺物には64があり、その他、出土層位が明らかなものは①層出土の60、③層出土の62がある。

図化した7点のうち、58は短頸壺。59～62は甕の口縁部である。

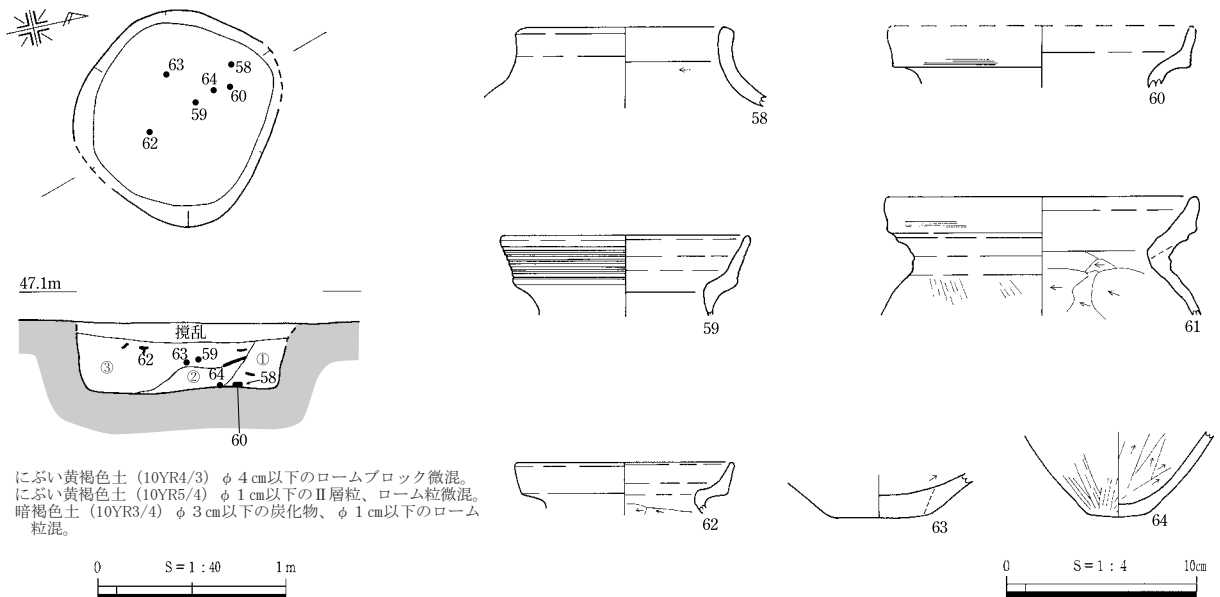
甕口縁部の形状はいずれも口縁上端が拡張し外傾ぎみなもので、下端に下垂は認められない。59・61では横方向へのわずかな張り出しが見られる。口縁帯は磨耗が著しく施文の有無を確認することが難しいものが多いが、58で7条の平行沈線を確認できた。63・64は壺又は甕の底部片で、どちらも平底である。

出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代後期後葉には廃絶していたものと推測できるが、性格は不明である。



- ① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のII層粒少混。
- ② 暗褐色土 (10YR3/3) φ 2 cm以下のII層ブロック多混。
- ③ 暗褐色土 (10YR3/4) φ 1 cm以下のII層粒多混。
- ④ 黒褐色土 (10YR2/3) φ 1 cm以下のII層粒少混。φ 7 cm程度のロームブロック混。縮りやや弱。
- ⑤ 暗褐色土 (10YR3/3) φ 3 cm以下のII層ブロック微混。縮り弱。
- ⑥ 暗褐色土 (10YR3/3.5) φ 4 cm以下のII層ブロック微混。縮りやや弱。
- ⑦ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 2 cm以下のII層ブロック多混。壁体崩落土か?
- ⑧ 褐色土 (10YR4/4) 粘性・縮り強。壁体崩落土と考えられる。
- ⑨ 暗褐色土 (10YR3/3.5) φ 1 cm以下のII層粒、φ 3 cm以下のロームブロック微混。

第32図 SK6



- ① にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 4 cm以下のロームブロック微混。
- ② にぶい黄褐色土 (10YR5/4) φ 1 cm以下のII層粒、ローム粒微混。
- ③ 暗褐色土 (10YR3/4) φ 3 cm以下の炭化物、φ 1 cm以下のローム粒混。

第33図 SK7及び出土遺物

SK8 (第34～38図・表6～8、写真2、PL.18・27～33)

調査地西寄りのM6グリッドに位置する。Ⅱ層上面で検出し、周辺の標高は約47mである。平面形は隅丸方形状を呈し、長軸3.0m、短軸2.6mを測る。検出面からの深さは、約2mに達する。掘り方の断面形は概ね逆台形で、掘削の深さは岩盤由来の礫層であるXI層にまで及んでいた。

調査時は東西・南北方向に土層観察用ベルトを設け、これに沿ってトレンチを掘削し、埋土の堆積状況を確認しながら全体の掘り下げを実施した。しかしながら降雨後、土坑内が湧水により滞水したため、随時水中ポンプ等で水を排出しながら調査を進めたが、その際に土層観察用ベルトが崩落し、土層堆積を記録できなかった。そのため、詳細については不明としなければならないが、以下、概要について述べる。

埋土下層は概ね黒褐色を呈する堆積が主体をなし、遺物の出土は無い。堆積の断面形は凹レンズ状を呈し、自然流入によるものと想定できる。一方、上層はローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土を中心とした堆積で、土器を中心に多数の遺物を包含する。土器は壺・甕片が大半を占め、弥生時代後期後葉に位置付けられる。土器片の接合状況は不良で、完形に復元できる資料は数点に留まる。また、出土土器相に目立った時期幅が認められないことから、上層出土遺物は一括廃棄された可能性が高い。土器のほかには石器(S5)、鉄製品(F3・4)の出土がある。

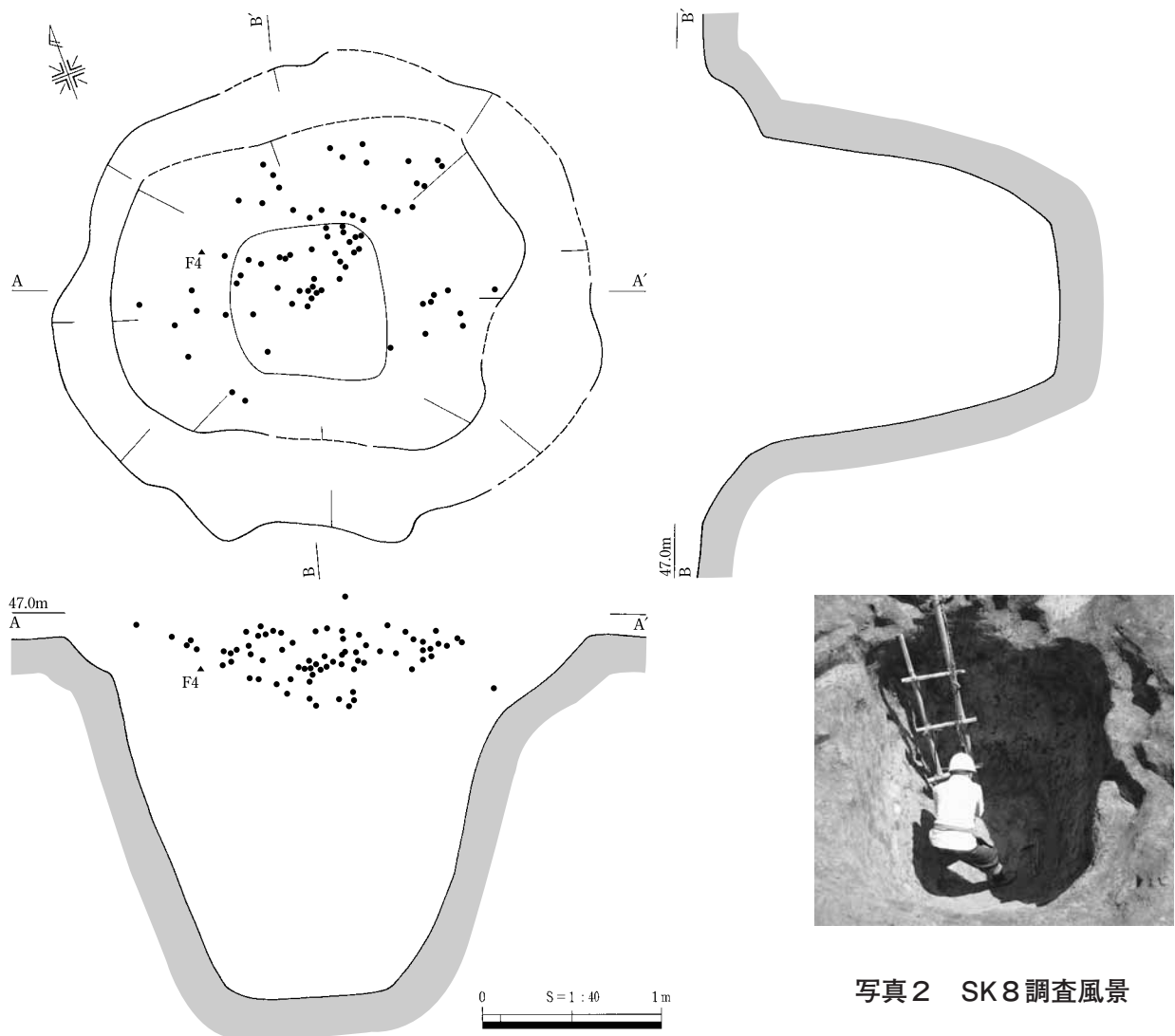
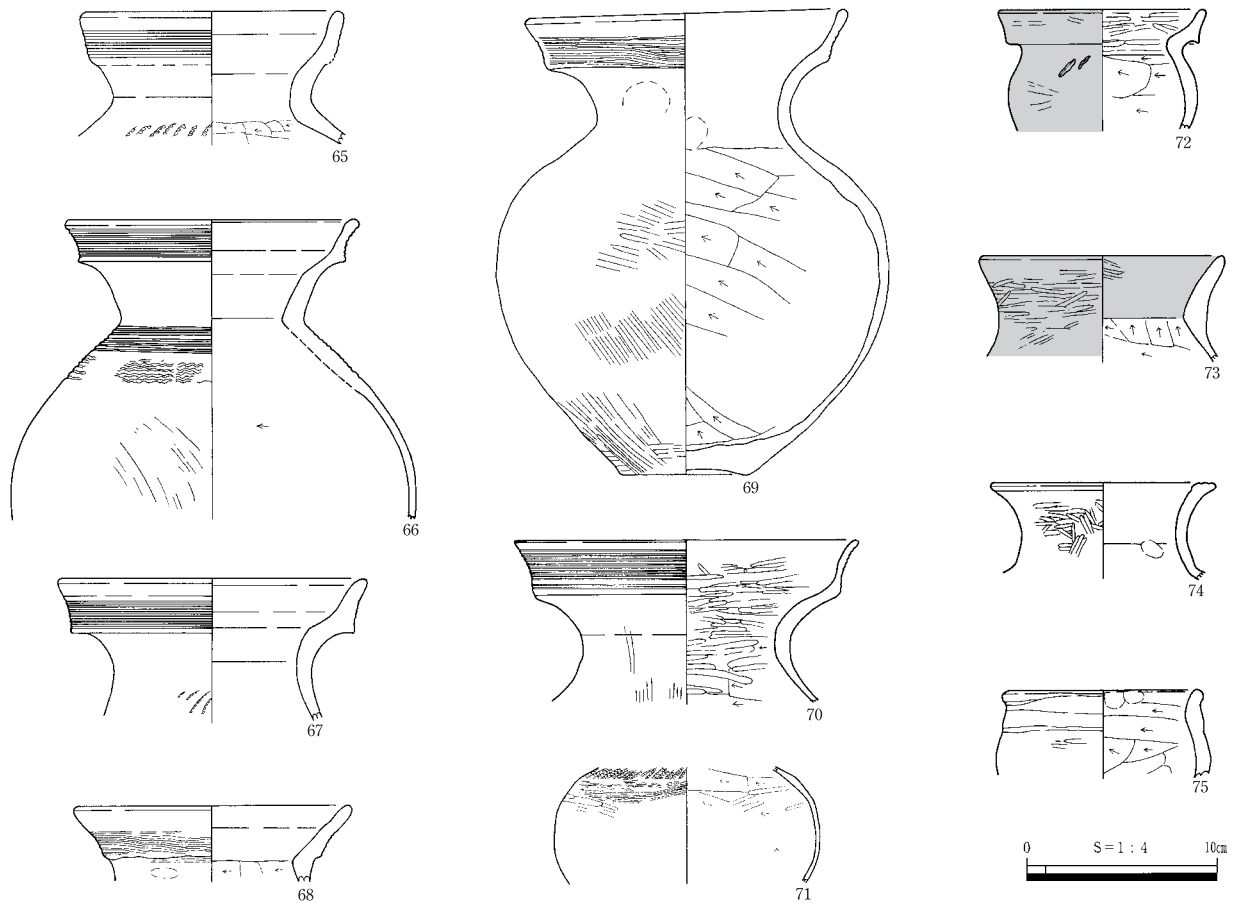


写真2 SK8調査風景

第34図 SK8



第35図 SK8 出土遺物(1)

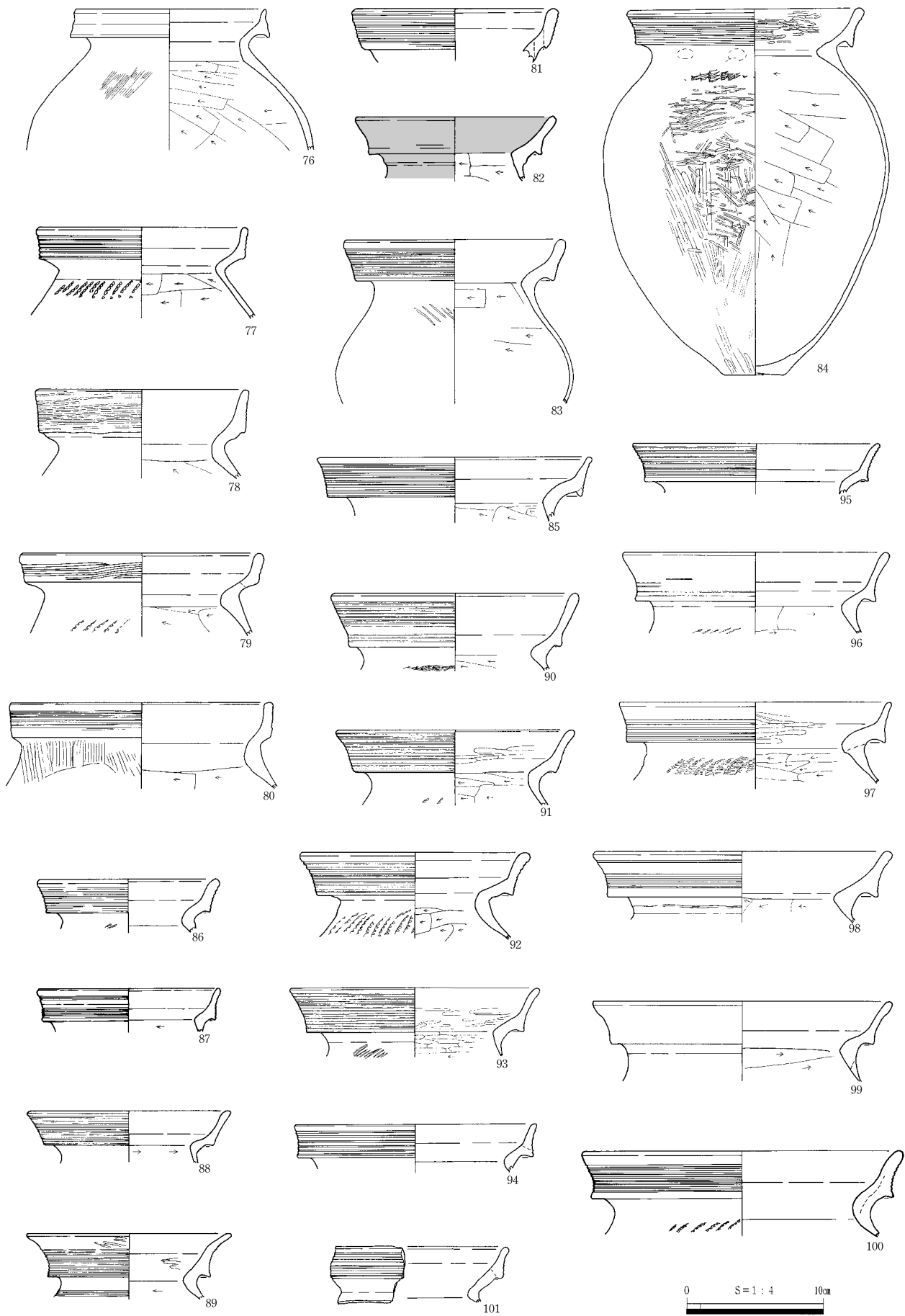
本土坑は約2mもの深さを測り、その掘削は岩盤にまで及ぶ。底面積は減じるものの、その平面形は検出面と同様に隅丸方形を呈し、底面までしっかりと掘り込まれていることが分かる。先述のように調査時、まとまった降雨後には土坑内に湧水が認められたことを勘案すると、井戸としての機能が窺われるが、明確な根拠は無い。このように用途についてははっきりしないが、掘削後自然埋没していく中途において、人為的な土器等の廃棄行為がなされ(弥生時代後期後葉)、最終的な埋没を迎えたと考えている。

第35～38図に出土遺物を掲げた。65～145は弥生土器である。

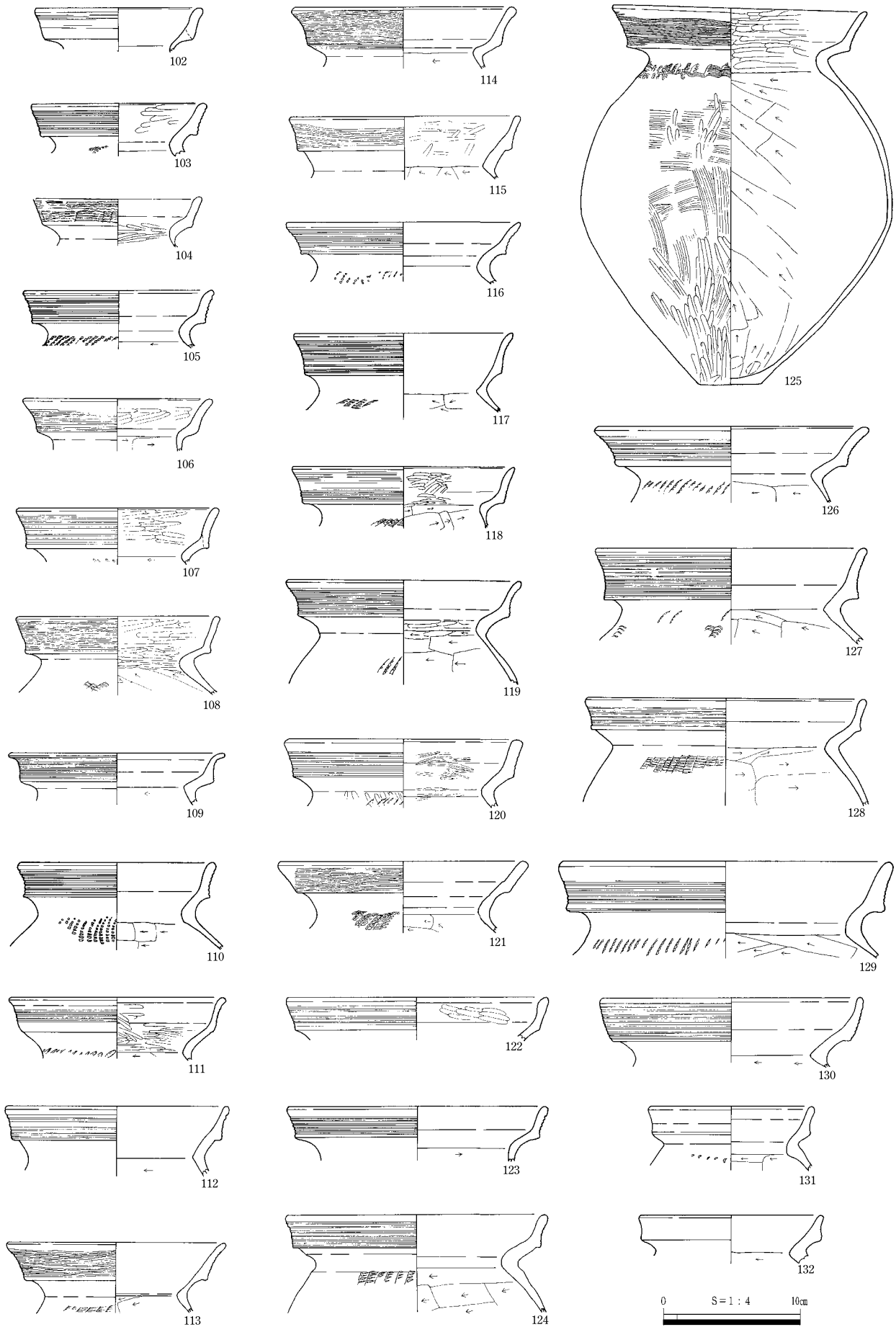
第35図65～75は壺である。65は複合口縁部の上端が長く拡張し、外傾する。66～70は拡張し外傾する口縁部上端が外反気味となる。そのうち69はほぼ完形に復元することができた。胴部中位が張り、なで肩状の器形を示す。71は薄手の胴部資料。72～75は小型の壺で、72は複合口縁を持ち、73の口縁部は頸部で短く屈曲する。74は比較的長頸の外反する口縁部を持つ。75は無頸で、全般に調整が粗雑に施され、ナデや指押さえ痕が明瞭に残る。

第36・37図には甕を掲げた。いずれも複合口縁部の上端が長く拡張するタイプで、その多くは口縁部に多条平行沈線が施される。ここでは口縁部の立ち上がり形態や口縁部下端の拡張の有無等により分け、概略を述べる。

第36図76の口縁部はやや内傾する。上端が拡張し、下端も短いながら拡張がみられる。77～80の口縁部は概ね直立し、下端の拡張がみられないタイプである。81～85は複合口縁部の下端が短く下垂するもので、81の口縁部はほぼ直線的に外傾、82～85は外反する。84はほぼ完形に復元できた。86～101は外反する複合口縁部の下端が、概ね斜め下方向へ張り出すものである。



第36図 SK 8 出土遺物(2)

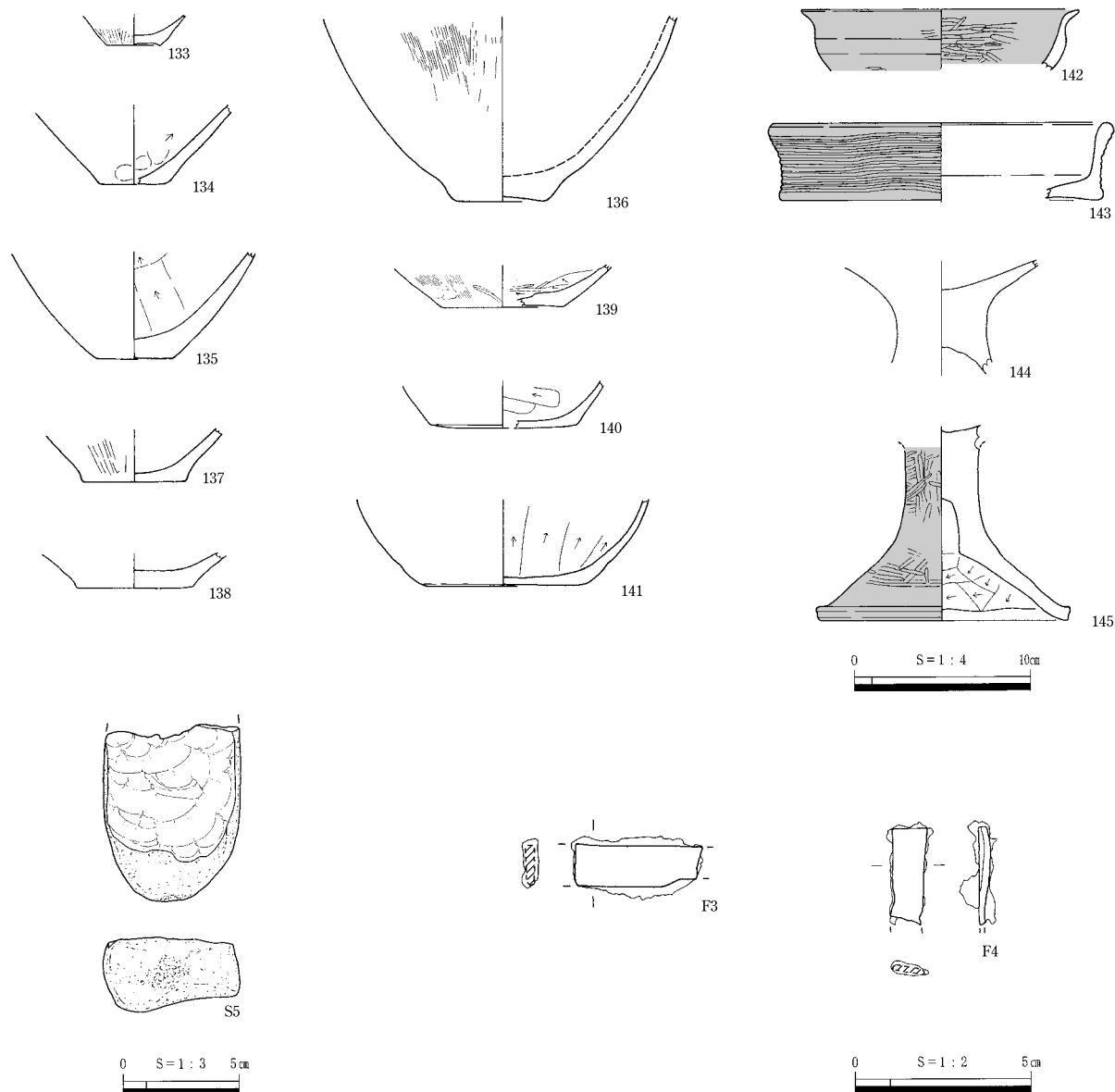


第37図 SK8出土遺物(3)

第37図102～132は、外傾又は外反する口縁部を持ち、下端の拡張がほとんどみられないものである。外反する口縁部を持つものが多数を占める。そのほかでは、区別が困難な資料もあるが、104・120～122のように口縁帯が概ね直線的に外傾するもの、130のように内湾するものがみられる。131・132の口縁帯には施文がみられない。

第38図133～141は壺又は甕の底部資料である。いずれも平底で、内面調整はケズリ、外面は磨滅した資料が目立つがナデ、ミガキ、ハケの痕跡が残る。142は口縁部付近のみ遺存し器種は判然としないが、高坏か。口縁端部が外反する。内外面は赤彩され、ミガキ調整される。143は壺、もしくは器台か。体部から口縁部にかけての器形が壺や甕における複合口縁の口縁帯に類似し、外面には多条平行沈線が巡る。磨滅が進行しているが外面には赤彩の痕跡がわずかに残る。144・145は高坏である。144は坏部下半、脚部上半にかけて遺存するが、磨耗が著しく詳細は不明である。145は、裾部で大きく開く脚部資料。外面は赤彩、ミガキ調整が施され、脚端部には一条の凹線文を確認できる。

S5は石器の敲石である。扁平な棒状礫を素材とし、一端に敲打痕を認める。表裏面には剥離痕、被熱痕跡が確認できるが相互の因果関係は不明である。



第38図 SK8出土遺物(4)

F3・F4は鉄製品である。F3は刀子か。大半を失っているが、わずかに関部付近が残存する。F4は薄手の用途不明棒状品。一端が振り切れ、欠損している。

SK9 (第39図、表8、PL.17・26)

E4グリッド、標高46.5mに位置し、SB4に近接する。I層上面検出の遺構である。

試掘トレンチによって失われ本来の規模は不明であるが、平面形は隅丸長方形と推測される。残存規模は長軸約1m、短軸0.8m、検出面からの深さ8cmを測る。

出土土器はいずれも小片で磨耗しており、図化できたのは土師器坏の口縁部(146)のみである。遺物の特徴から廃絶時期は古代以降と推測できるが、遺構の性格は不明である。

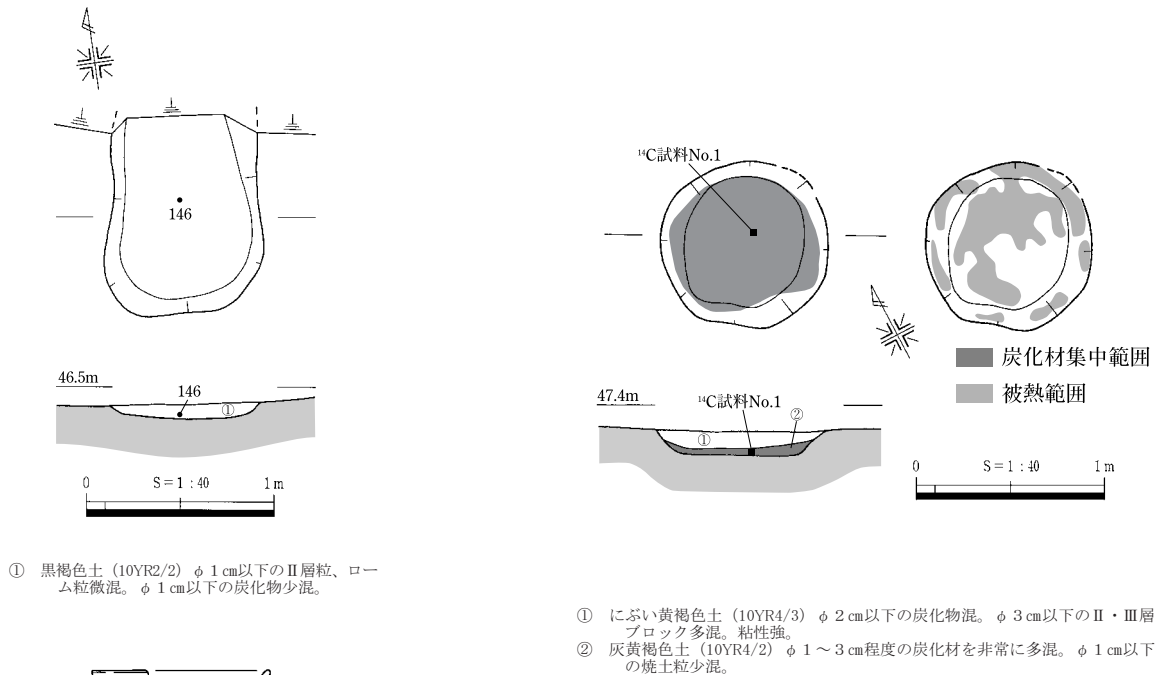
SK10(第40・51図、表13～15、写真3、PL.19)

H7グリッド、標高47.2mに位置し、SD2と重複する。本遺構はSD2埋土を掘削中、溝底面にて検出した。したがって、SD2との先後関係については明らかでない。

平面形は径88cmの円形で、検出面からの深さは最大で13cmを測る。

埋土は、ロームブロックを多く含んだにぶい黄褐色土を主体とするが、最下層には1～3cm大の炭化材を極めて多く含む層が厚さ3～6cm程堆積する(②層)。また、土坑底面と壁面は被熱により赤変しており、底面における被熱範囲は北半に偏る傾向がみられる。これらを総合すると、本遺構の性格としては製炭に関連する遺構の可能性はある。

土器等、他の出土遺物はなかったが、土坑底面で検出した炭化材の一部を採取し(第40図)、放射性炭素年代測定を実施したところ、15世紀後半～17世紀前半という測定結果を得た。また、別途任意に抽出した試料で樹種同定を実施した。その結果、クスノキ属、ヤマハゼを検出している。



① 黒褐色土 (10YR2/2) φ 1 cm以下のII層粒、ローム粒微混。φ 1 cm以下の炭化物少混。

① にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 2 cm以下の炭化物混。φ 3 cm以下のII・III層ブロック多混。粘性強。
② 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1～3 cm程度の炭化材を非常に多混。φ 1 cm以下の焼土粒少混。

第40図 SK10

第39図 SK9及び出土遺物

SK11(第41・51図、表13～15、写真3、PL.19)

I3グリッド、調査区北際の標高46.3mに位置する。I層上面検出の遺構である。

根による攪乱を受け、平面形は歪な隅丸方形を呈する。平面規模は長軸82cm、短軸70cmで、検出面からの深さは18cmである。底面や壁面に被熱はない。

埋土は2層に分かれる。このうち①層中には多量の炭化物を含み、炭化材小片や焼土粒も混入する。

遺物は出土していないが、炭化材の放射性炭素年代測定結果は、製炭土坑SK10と同様に15世紀後半～17世紀前半という暦年代範囲を示している(第3節参照)。ただし、後述のとおり、試料2は部位不明の炭化材であり、内側の年輪である可能性がある。このことから、当測定結果については木材の枯死・伐採年より古い可能性は残る。

本遺構の性格については、炭化物の出土状況やSK10との関連性が窺われる点から、製炭に関わる遺構の可能性はある。

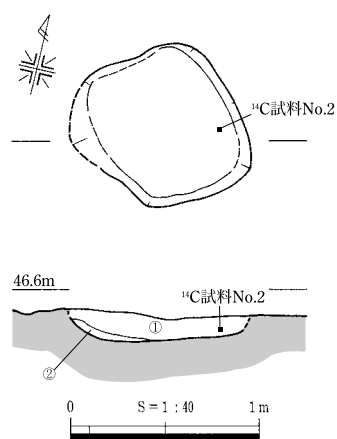
SK12(第42図、PL.20)

J6グリッド、標高47.3mに位置し、1m南東にはSK13がある。本遺構はSD2を掘り下げる過程で確認したもので、検出面での平面形は長軸1.3m、短軸1.2mの楕円形に復元できる。底面は平らで、直径60cmの円形を呈する。検出面から底面までの深さは60cmを測る。

出土した土器は小片で時期を明らかにできておらず遺構も性格は不明だが、埋土の切り合い関係から、SD2埋没後に掘り込まれたものとする。

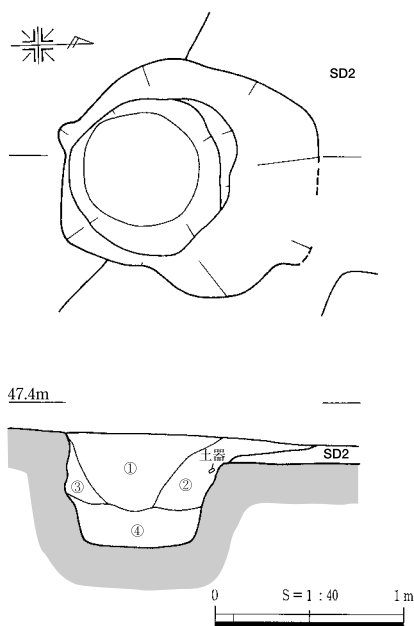
SK13(第43図、PL.20)

J7グリッド、標高47.3mに位置し、SD1と重複する。1m北西にSK12がある。SD1掘り下げ後に確認したため、本遺構とSD1の切り合い関係は明らかにできていない。平面は長軸84cm、短軸53



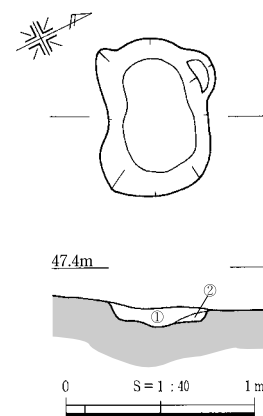
- ① 黒褐色土 (10YR2/3) φ 2 cm程度の炭化材混。
φ 1 cm以下の焼土粒少混。
② 暗褐色土 (10YR3/4)

第41図 SK11



- ① 暗褐色土 (10YR3/3) φ 1 cm以下のローム粒を斑状に多混。
② 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 2 cm以下のロームブロック多混。
締りやや弱。
③ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。締り
やや弱。
④ 暗褐色土 (10YR3/3) φ 2 cm以下のロームブロック多混。

第42図 SK12



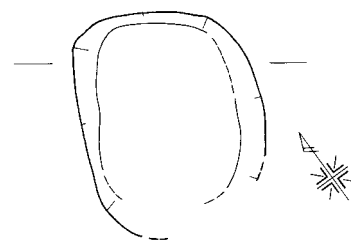
- ① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のⅡ・Ⅲ層ブロック少混。締りやや弱。
② にぶい黄褐色土 (10YR5/7) φ 2 cm以下のⅡ層ブロック少混、Ⅲ層ブロック多混。締りやや弱。

第43図 SK13

cmの歪な楕円形で、SD1底面からの深さは13cmである。

埋土は黒褐色土を主体とし、壁際に地山に由来するにぶい黄褐色土の堆積がある。

遺物は出土しておらず、本遺構の性格・時期は不明である。



SK14(第44図、PL.20)

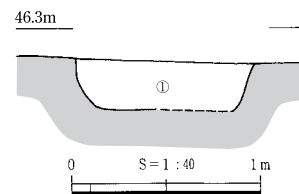
D～E2グリッド、標高46.2mに位置する。

表土下、II層上面検出の遺構である。

根攪乱を激しく受けて掘り方の大半を失っているが、長軸1.1m、短軸0.95mの楕円形に復元でき、検出面からの深さは26cmである。

埋土にはロームブロックを多く含んでいたことから、機能停止後に埋め戻された可能性がある。

遺物は出土しておらず、遺構の性格・時期は不明である。



① 黒褐色土 (10YR2/3) φ 3cm以下のII層ブロック多混。縮り強。

第44図 SK14

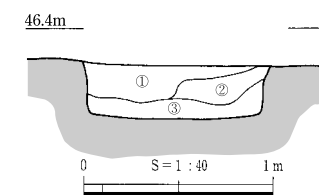
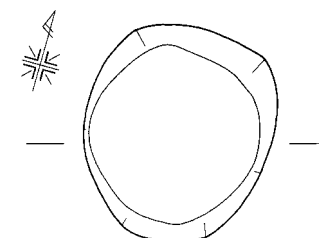
SK15(第45図、PL.20)

C4グリッド、標高46.3mに位置する。

現道下精査中に確認した遺構で、平面は長軸1.1m、短軸1mの楕円形を呈し、検出面からの深さは28cmである。底面は平らで、長軸92cm、短軸90cmの円形である。

埋土にはロームブロックを多く含んでいたことから、SK14と同様に機能停止後に埋め戻された可能性がある。

遺物は出土しておらず、遺構の性格・時期は不明である。



① にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 5cm以下のIII層ブロック多混。粘性やや強。
② 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 3cm以下のIII層ブロック多混。粘性やや強。
③ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 3cm以下のIII層ブロック混。縮りやや弱。粘性やや強。

第45図 SK15

6 ピット(第46～49図、表3、PL.33)

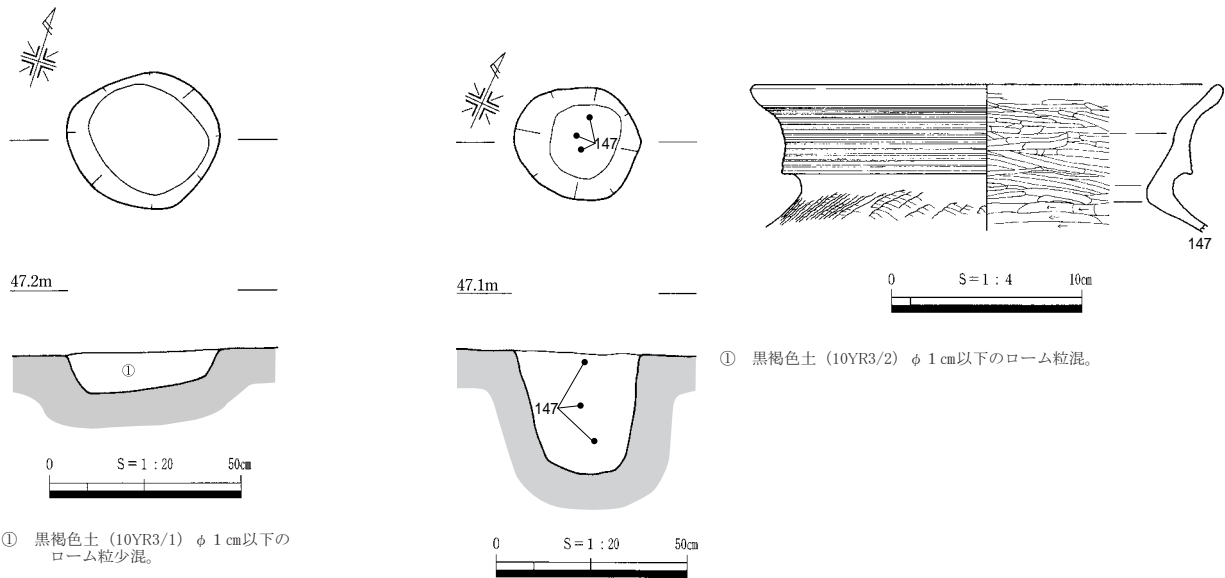
調査区西側において、表土下II層上面でピットを4基検出した。このうち、P4では攪乱土の一部を埋土ととらえてしまい、若干壁面を掘りすぎる結果となった。

ピットはいずれも埋土が単層であり、柱痕跡を確認できたものはないため、これらのピットの性格を明らかにできていない。また、次に述べるとおり、P2から遺物が出土しているが、この遺物がピットに直接関わるものなのか、周囲からの流入であるのかも不明である。

遺物はP2から、甕(147)が出土した。147の口縁部は上端が長く拡張・外反し、下端はやや斜め下方向に突出している。口縁外面には14条の平行沈線、肩部には貝殻腹縁による刺突を施す。内面の調整は頸部にケズリ、口縁部には横方向のミガキ痕が残る。これらの特徴から、147は弥生時代後期後葉に比定できる土器である。

7 遺構外出土遺物(第50図、PL.26)

148は須恵器で、無高台の壺である。攪乱土中より出土した。底部資料で、内面は回転ナデが施され、外面は回転ヘラケズリ後、回転ナデ調整される。古代に帰属すると考える。



第46図 P1

第47図 P2 及び出土遺物

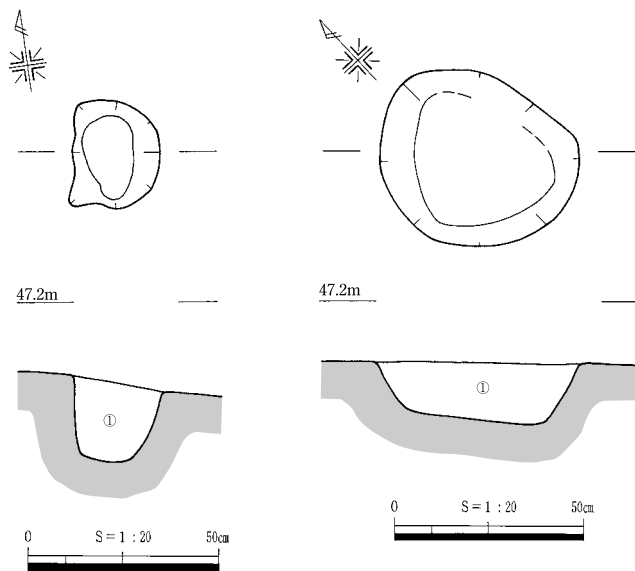
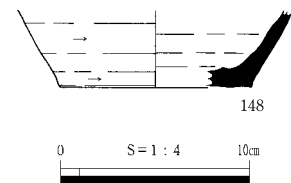


表3 ピット計測表

遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
P1	37	37	11	
P2	32	30	33	147出土
P3	28	23	23.5	
P4	54	45	17	



① 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1cm以下のローム粒混。

① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1cm以下のローム粒多混。

第48図 P3

第49図 P4

第50図 遺構外出土遺物